

短大英文科の入試問題について

—受験生の実情から見た問題点

大 西 光 興

I. はじめに

大学及び短期大学で入学試験を実施する目的は、受験生が高校終了時まで身に付けるべき知識・技能を大学教育に耐え得るほど十分に養ってきているか否かを判定することであろう。英語に関して言えば、学習指導要領にもうたわれているように「英語を理解し、英語で表現する能力を養うとともに、言語に対する関心を深め、英語を母国語とする人々の生活やものの見方などについて理解を得させる」という目標が各受験生においてどれほど達成されているかを測定し、その数値によって大学教育を受ける適性の有無を判定することであろう。

入学直後から集中的に英語を学習させ、2年間で「役立つ」水準まで英語力を引き上げることを社会から要請されていると考えられる短大英文科の入学試験においては、特に英語の運用面での基礎力が十分身につけている生徒を選抜して、英語指導の成果を一層高めたいという願いが強くこめられている。しかるに、短大英文科の入試問題の中に相当多く、現在の高校での英語教育の実情をふまえて英語そのものの（読む、書く、聞く、話す）運用力を正当に判定しているかどうか疑問に思わざるをえない問題を含んでいるのは大変残念なことである。以下に実例を示しながら問題点を指摘してみよう。検討対象は以下の短大英文科が1988年2月に実施した入試問題である。

A 上智短大, B 大妻女子短大, C 学習院女子短大, D 駒沢短大,
E 神奈川県立外語短大, F 名古屋短大, G 南山短大, H 同志社女子短大,
I 大阪女学院短大, J 関西外語短大 以上10校。

II. 問題点

1. 高校での英語教育の実情への認識不足。

私立のいわゆる進学校を除いて、全国の高校ではカリキュラム編成に当たり、学習指導要領の示すところに従い、英語Ⅰ4単位、英語Ⅱ5単位、英語ⅡA、ⅡB、ⅡC各3単位(2科目選択)合計15単位としている場合が多い。すなわち各学年平均週当たり5時間しか英語を学習していないということである。また国、公立中学では週3時間しか英語を教わらなかったのである。このように全国の大部分の高校卒業生は制度上の制約を受けて英語学習の機会に十分恵まれていたとは言えなかったのである。さらに多様な資質の生徒が四十数名詰めこまれている教室で、検定教科書を用いて画一的に行わざるを得なかった英語指導が到達できるレベルは、短大の英語教師が卒業したころの高校のレベルとは大きな開きが生じているのである。したがって、あまり高度の英語を入試問題に出題するならば一部の有名私立進学高校出身者や塾通いを続けることのできた裕福な家庭の子女にのみ有利となり、教育の機会均等の根本精神に悖ることとなる。以下に一般の高校卒業生にとって無理と思われる出題例を問題点別に挙げる。

(1) 語彙が難しすぎる。

- A. avert, beseech, fallibility, jumble, maladroit, neurone, wince など
- E. authoritative, coherent, revelation, revengeful, semester, sovereign など
- G. apologetic, cactus, fleetingness, implication, mortality など
- J. amplitude, billow, frenzied, fussy, herald, ingenuous, lizard, maxim など

検定教科書中心に英語を学習してきた一般の高校卒業生にとってはせいぜい2500語くらいしか語彙力がない。ところが上記の語はすべて使用頻度から言って上位の7000語の範囲(「英和中辞典」で重要語としてい

るもの)に含まれていず、受験生にとっては全く歯が立たない。せめて注をつけるか、易しい語を用いて書き換えるような配慮が必要と思われる。

(2) 問題量が多すぎる。

入試によって英語力を判定する場合、瞬間的な反応能力よりは、思考力と感性を総動員してじっくりと問題を解く能力を見ることに主眼が置かれているはずである。しかし一般の高卒レベルの受験生にとっては許容された総時間内に全問に解答をするのが困難と思われるほど多量の問題を課している短大がかなり多い。以下に試験時間と解答すべき問題の

短大	試験時間	問題総数	長文の語数と通読時間	1問平均時間
A	120分	89	約1000語 (約20分)	1.12分
B	60	38	約800 (約15分)	1.18
C	60	44	約550 (約10分)	1.14
D	60	44	約550 (約10分)	1.14
E	100	63	約1600 (約30分)	1.11
F	80	74	約750 (約15分)	0.87
G	120	65	約1400 (約30分)	1.38
H	60	36	約750 (約15分)	1.25
I	80	35	約800 (約15分)	1.86
J	90	86	約950 (約20分)	0.81
文教	90	54	約650 (約10分)	1.48

総数と長文問題の総語数、長文通読に要すると思われる時間を差し引いて1問当たり配当できるであろう時間を表にまとめてみた。

GとIでは自由英作文問題が出題されているので、それに少なくとも20分くらいは時間を要すると思われるので、実質は1問当たりGは1.09分、Iは1.32分程度であろう。全問ひとわり解答を書き終えたとしても、少なくとも1回は見直しが必要であろう。そのための時間を差し引くと、1問あたり1分未満ということになり、とても思考力と感性が十分発揮されるとは考えられない。

(3) 高校での学習内容を超えている。

普通、高校で扱う英文は現代の標準的な英語で書かれたものであって、非文法的な文や俗語的表現は含まれていない。また英米の作家について学ぶ機会も少ない。しかるに、GではWilliam Saroyan作 *The Human Comedy* の中の *You Go Your Way, I'll Go Mine* から原文のまま出題しており、次のような文を含んでいる。

…I make it for my Juanito when he *come* home, …

…What *the hell* can I do? …

またFはShakespeare, Hemingwayなどの人名とその説明文とを結合させる問題を出しており、説明文の意味が理解できたとしても、それらの人物についての知識がなければ正解が得られない。そのような知識は高校英語が扱う範囲外のことがらである。

出題分野と形式に片寄りがある。

(1) 音声面の英語力の判定が不十分。

中学・高校と一貫して4技能(読む・書く・聞く・話す)を調和を保ちつつ段階的に伸ばすという英語教育の本来のあり方に従って指導がなされて来たのだから、受験生の英語力の判定は以上の4技能すべてにわたって行なわれるべきである。しかし現実には技術的に公平さが保ち難い

との表向きの理由で音声面の英語力判定がほとんど行われていない。対象校10校中ヒアリング・テストを実施しているのはE・G・Jの3校に過ぎない。全国主要短大英文科41校でも、ヒアリング・テストを実施しているのは約 $\frac{1}{3}$ の14校のみである。音響機器の技術が発達した現在、すべての英文科の入試に音声面のテストを導入すべき時に至っていると考えられる。

(2) 英文読解と文法・語法のテストに片寄りすぎ、英語による表現力を試す問題が少ない。

対象校10校中、自由英作文を出題しているのはGとIだけであり、日本語をすべて英訳させる問題を出しているのはEとCだけである。他は書き出しを指定したり、英訳文中の空所補充形式や整序形式であって、文法力テストの延長とみなされるべきであろう。現在は発信型の英語力がより強く求められている。したがって入試においても、枝葉末節にとられない豊かな表現力を指向するような問題をもっと多く出題すべきであろう。

(3) 出題の中身に問題があるものがある。

ある1つの問いに対する正解は1つに限るのが原則である。特に客観テストに於てはそうである。ところが次のような問いに対して正解が1つに限ると言えるであろうか。

①Bの整序作文では *between you and me* だけを正解としているが、口語では *between you and I* とも言うのではなかろうか。

②Fのアクセント問題で、他動詞 *protest* のアクセントの位置を *pro-tést* のみとしているが、*prótest* も特にアメリカでは存在するのではないか。

③Gの誤訳訂正問題で *From childhood Picasso showed a strong interest to paint that remained with him throughout his life.* で1か所訂正するとすれば受験生はまず *to paint* を *in painting* と変えるであろう。ところが

From childhood という副詞句から判断して showed を「継続」を表す形 had been showing に変えなければならないとも考えるであろう。そうすると 2 か所訂正が必要となり困惑してしまう。

(4) 長文を出題した理由が薄弱。

300語以上もの長文を通読させるにも拘らず、設問が長文全体の大意把握よりは、細かな文法、語法、語彙、発音の断片的知識を文脈とはほとんど無関係な形で試すものがかなり多い。例えば A の長文問題の設問中におけるアクセント問題、整序問題、H の長文中の語句の意味の選択などは長文を読み通さなくても正解できる。また下線部訳もこのような傾向のものが多い。例えば C の □ の中の… Marriage today is ideally seen as partnership in which husband and wife share each other's interests and worries, …や D の □ の中の… One who constantly changes his place of employment will not grow rich …などはこの部分だけ見て訳せば事足りる。

(5) 対話文・会話文の出題が少ない。

現代ほど英語によるオーラル・コミュニケーションの能力が求められる時代はないであろう。ところが入試に関してはこのような時代を反映していないようである。つまり会話能力を試す問題があまり出題されていない。対象校10校中この分野の出題をしているのは I だけである。全国主要短大英文科41校中でもわずか14校に過ぎない。出題に際しては旧弊を排し、新しい時代の要請に応ずるものでなくてはなるまい。

Ⅲ. まとめと提案

問題点を要約すると次の通りとなろう。

1. 語彙が難しすぎる。
2. 問題量が時間に比して多すぎる。
3. 英語以外の知識を試していることがある。

4. 音声面の力を試すことが少ない。
5. 英文読解力、文法や語法の知識のテストに片寄り過ぎ、英語による表現力を試す問題が少ない。
6. 長文問題の設問の中で必ずしも全文やコンテキストの理解に立脚しなくても解けるものがかなり含まれていて、長文を読ませる意味が稀薄となっているものがある。
7. 複数の答えが可能であったり、問題の指示がわかりにくいものがある。
8. 会話表現の力を試す問題が少ない。

以上となろう。

入試制度そのものに改善すべき余地の多い現在、これがベストだとの共通理解が得られる改善策は未だ存在していない。しかし、だからと言って受験生を苦しめている今の入試のあり方を放置してはなるまい。それゆえ、緊急に行うべき実現可能な入試問題作成上の改善点として次の2点を提案したい。

1. 使用語彙を易しくする。

全英連「新高校基本英単語活用集」や学習指導要領、高校用検定教科書等で必ず難易度を確認し、難しそうだと判断されれば注をつけるか、より易しい単語に書き変える。

2. 4技能すべてにわたって適切な量の出題をする。特に音声面のテスト、表現力テストを増やし、読解力・文法力テストを減らす。特に音声面の力をテープ等を用いて大幅に取り入れる。以上の2点はさっそく来年度の入試からでも実行可能と思われる。要は改善の意志があるか否かということに帰着するであろう。

(1989年1月)

参考書類

63年実施全国短期大学入試問題正解 1988 (旺文社)

- 高等学校学習指導要領（外国語科編） 1979（文部省）
片山嘉雄他編「新・英語科教育の研究」 1986（大修館）
青木昭六他編「英語の評価論」 1985（大修館）
Finocchiaro, Sako : *Foreign Language Testing* 1983（Regents）
英和中辞典（第5版） 1985（研究社）
全英連「新高校基本英単語活用集」 1988（研究社）